

Physicality of the Allegorical Kings in Two Tudor Interludes : A Satire of the Three Estates and Magnificence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米村, 泰明 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/584

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



インターラードにおける寓意的「国王」の身体について

— *A Satire of the Three Estates* と *Magnificence* —

Physicality of the Allegorical Kings in Two Tudor Interludes

— *A Satire of the Three Estates* and *Magnificence* —

米村泰明

YONEMURA, Yasuaki

国家意識の高まりの中で国王の在り方に視線を当てる二つのインターラードで描かれる、寓意的国王の身体性に着目する。道徳劇の枠組みの中で、作者の意識の中に登場人物の身体性が芽生えていることを指摘する。

はじめに 身体性を持つ寓意的「国王」

道徳劇および初期のチューダー・インターラードに共通してみられる構造は、主人公である「人間」が無垢な存在として登場するものの、やがて悪徳の誘惑を受け、墮落し、しかし悪徳に裏切られなどして過ちを知り、改悔することによって救済を得るという、いわゆるプシコマキアのパターンである。

ルネサンスの進展とともに、人文主義的傾向が見られるようになる。たとえばHenry Medwallの*Nature*（『自然』1496年）では誘惑する悪徳が「世俗の愛」と「感覚」、救済へと導く美徳が「理性」になっている。「人間」は最終的に宗教的救済にあずかるのであるが、宗教的な教訓性以上に、メドウォールの人文主義的な視点が盛り込まれていると言えるだろう。

時とともにインターラードはキリスト教的

世界観よりも、国家意識に密着する社会性が盛り込まれるようになり（1530年頃の*The Prodigal Son*『放蕩息子』や1560年頃の*The Disobedient Child*『わがまま息子』では若者の教育の重要性など）、ついには社会のあり方に対する批判するインターラードに行き着く（1577年の*All for Money*（『金がすべて』）では、さまざまな社会階層において金銭的腐敗が広がっていることが国家の危機に繋がることを警告している）。チューダー朝の国家戦略を反映するかのようになり、ルネサンス期の演劇作品は、道徳劇の枠組みを維持しながら国家を強く意識し、社会のあり方に批判と提言を繰り返して行くのである。

そのような流れの中で「国王」という存在のあり方と国家の関係をテーマとするインターラードが登場するのも必然であったかもしれない。作者不詳の*Respublica*（『国家』1553年）は、プロテスタントのエドワード六

キーワード：インターラード、身体性、*A Satire of the Three Estates*、*Magnificence*
Key words : Tudor Interlude, physicality, *A Satire of the Three Estates*, *Magnificence*

世統治下で蔓延した弊害や悪弊が、新たに即位したメアリー女王によって一掃されることを宣言する新政権による改革色の強い作品となっている。メアリー女王自身は登場せず、主人公は寓意としての「国家」である。「国家」は国の現状を嘆くものの、「追従」「抑圧」「傲慢」というに悪徳の正体を見抜くことができない。さらに国情が悪化し、「民衆」の不満も高まるところで、「慈悲」「真実」「平和」「正義」の神の4人の乙女が悪徳たちの正体を暴き、悪徳は処罰を受け、作品はメアリー女王の治世が栄えることを祈念する言葉で締めくくられる。一方、John Baleの*King John*（『ジョン王』1583年ころ）は、イングランドのジョン王とローマ教皇インノケンティウス三世の争いという歴史的事実を劇化したものである。ローマ教皇は「不法権力」という寓意的な人物として登場するが、ジョン王は（実在の人物とは違うものの）歴史上の人物として描かれている。歴史劇の先駆けとも言える作品であるが、両者の宗教的対立と絡めて、「英国」という寓意を巡る、美徳と悪徳のせめぎ合いが展開する、道徳劇の枠組みを兼ね備えている。両作品とも、きわめてプロパガンダ色の強い作品である。

本稿で扱うのは、16世紀半ばにスコットランドの宮廷人であったDavid Lindsayによって書かれた*A Satire of the Three Estates*（『三階級の風刺劇』。以下『三階級』¹⁾）とイングランドで1490年代あるいは1515-20年ころにJohn Skeltonによって制作されたと考えられている*Magificence*（作品名としては以下『王威』²⁾）である。両作品とも、作者が仕えた国王と宮廷のあり方に対する警告と教訓となっているが、国王の姿は寓意的に描かれ、その矛先がヘンリー八世にもジェームズ五世

にも向けられないように配慮されている。上記の2作品に比べると、政治的色彩は薄い。さらに大きな違いは、寓意的存在である国王の身体性が極めて明確に描かれていることである。

国王としてのMagnificence（登場人物名としては以下「王威」）は宮廷に入り込んでくる悪徳たちの口車に乗せられて墮落し、ついには自殺寸前にまで至るが、「希望」により救われる。一方、Rex Humanitas（以下「人間の王」）も悪徳の虜になるが、最後には美徳の言葉を受け入れ悪徳と決別する。形式的にはプシュコマキアのパターンにのっとっており、キリスト教的な教訓性は基本的に残されている。

だが、作者の関心の在処は大きく違って来ている。舞台は現世という普遍化された場ではなく、エリート層に限定される宮廷となり、悪徳と美徳、あるいは、善と悪が奪い合うのは国王の魂ではなく、その支配権のあり方となっている。どちらの作品もイングランドとスコットランドの政治情勢を反映しているものの、現実の政治への直接的な言及は極力避けている。両作品とも、道徳劇の基本構造を借りて、「国王のある姿」と「あるべき姿」の微妙なバランスを維持しているのである。

このバランスは、「人間の王」も「王威」も、寓意性と現実の肉身の双方を持つ存在として描かれていることによって保たれる。『三階級』も『王威』もともに王の身体のあるかたを明確に描写しているのである。では、作者は寓意的人物の身体性をどのように意識していたのであろうか。

『三階級の風刺劇』に見る国王の身体性

『三階級』に登場する「人間の王」はスコッ

トランド王ジェームズ5世を擬している。スコットランドの宮廷に重臣として仕えたLindsayは、隣国イングランドとの関わりの中で「国家のあるべき姿」をこの作品によって示唆しようとしたのだと考えられている。³⁾この作品は数度の上演が行われ、その度に内容に変更が加えられている。本稿では1554年版を中心に用いて「人間の王」の身体性に関わる台詞に注目しながらストーリーを追って行く。

「人間の王」は神の地上における代理人として理想的な姿で紹介される。従来の道徳劇に登場する悪徳を知らない段階の無垢な人間の姿でもある。しかしその王は数年間眠りについており、国内は乱れてしまっていることも語られる。(Howbeit that hee lang tyme hes bene sleipand, / Quhairthrow misreull hes rung thir monie yeris, 24-5)「眠り」は、怠慢を象徴する生理現象になっていることを示唆している。その王が目覚め、三階級を招集して議会を開くことが決定されたのである。しかし、宮廷に入り込んだ悪徳の妨害により、「人間の王」の真の覚醒が訪れるのはまだ先のことである。

登場後に玉座につく「人間の王」の表情に関して、1552年版では「いかめしい顔つきをする」ように指定されている。(Heir shall the king pass to royall sait and sit with ane grave countenance... ただし1554年版にはこの指示はない) その表情は悪徳にとっては好ましからざるものである。Wantonnesは「そんな顔はしないで、楽しく時を過ごす (Quhat garris yow mak sic dreirie cheir? / Be blyth sa lang as ye are heir, / And pas tyme with pleasure: (104-105) 》ように勧める。

この表情は、眠りから覚めた「人間の王」

の威厳と神の意志に従う決意を表そうとしているのだと受け取れる。言葉ではなく、身体をもって表すことは、「人間の王」が単なる寓意的存在にとどまらないこと予感させるものとなっている。

しかし、この決意は悪徳にとっては都合が悪いことになる。国王の本来の機能を正常に働かせないために、現世での快樂に誘うことは悪徳の常套手段である。ここでの現世は宮廷である。王の取り巻きであるSolaceは、Sensualityを愛人とするように唆す。「人間の王」の関心を引きつけるのはSensualityの肉体的特徴である。彼女は「自然界が生み出した最も美しい生き物で、赤い唇と白い頬をもち、その顔を見るだけで肉体が騒ぎ立つ」(It wald gar all your fleshce vp ryse, / To luik vpon hir face, 204-5) と描写される。

登場したSensualityが語る自らの姿は、Hamerの注釈によれば当時の娼婦の姿である。⁴⁾従来の「色欲」という寓意的存在以上の肉体を舞台上に現すことで、肉体を持つ王がやすやすと肉欲の誘惑に屈する根拠にも現実性が与えられることになる。Sensualityを呼び出すよう命じる「人間の王」の肉体は期待に震えるのだ(My bodie trimblis feit and hands, 371)。さらにSensualityn以外には自分の症状を治せないと言う(And say I ly in languisching, / Except scho mak remeid: 387-88)。色欲への衝動を、魂の状態としてではなく、肉体の病ととらえていることが窺える。

肉体の病の治療をSensualityに求める行為自体が墮落への第一歩となる。しかし無垢な魂に該当する「人間の王」は、まだそのことに気がついていない。しかも、彼は女をどう扱ったらよいのかをまだ知らないため、Wantonnesに助言を求める。無垢な王に、

Wantonnesは「口づけをし、抱きしめなさい、胸布の中までキスしても彼女は尻込みしませんよ」(To kis hir & clap hir sir be not affeard; / Sho will not shchrink thoct ye kis hir ane span within the baird. 489-90.) とあからさまに肉体的な助言を与える。

しかし、実際に舞台上でこのような行為が行われる訳ではない。むしろ、この作品で特徴的なことは、肉体への言及が多いにもかかわらず、「人間の王」に肉体的活動をほとんどさせないということである。Sensualityを迎え入れた王は、その後270行ほどの間、二人で部屋に閉じこもり、舞台から姿を消す。「人間の王」が舞台に再登場するまでに、実に15ヶ月間が経過する。(I see fyfteine Mones in the lift. 826) この15ヶ月間、この国には国王が不在だったのだ。

「人間の王」の無為は再登場後も続く。再登場した「人間の王」が、Gude-Counsellの来訪に気づくのが928行。Dissaitに用向きを尋ねに行かせる間も「この場に座って待つ」(I will sit still heir and repois. 934) だけである。さらにVeritieが登場する際にも、「人間の王」は歌を歌う女たちの間に寝そべっている(Heir sall the Ladies sing ane sang, the King sall ly doun aang the Ladies, and then Veritie sall enter. 1025 SD)。Veritieの来訪に危機感を抱くFlatterieの言葉から「王が愛人と寝ている」ことが明らかになる。(Now quhill the King is with his luif sleipand. 1096)

この作品では、国王がそのあるべき機能を果たしていないことを、「眠り」「不活動」で表現しているのである。それは、Verityが神に訴える台詞にも反映する。Verityは宗教改革に共感していたLindsayの代弁者として、神の言葉を文字通り「踏みにじる」ローマ教

会の改革を求めている。神ですら「あまりに長く眠りについている (Get up, thow sleipis all too lang, O Lord, 1160)」のである。

改革は、「眠りから覚める」という象徴的行為によって始まるのだ。しかし「人間の王」はまだ悪徳の支配下にある。Verityは宮廷の悪徳たちによって足枷をはめられる。ChastityもSensualityによって王の面前から放り出され、足枷をはめられる。ChastityはSensualityと対極の美德であり、両者が同時に存在することはできない。どちらを取るかは王の判断次第である。しかしこの件に関する「人間の王」の台詞は、判断をSensualityに任せ、また二人の快楽に戻りたいというだけである(Thairefter wee sall turne but tarying. 1419)。

国王を目覚めさせるのはDivyne Correctiounである。Divyne Correctiounは神に命じられて、神の御心に反するものを懲らしめる役割を持っているが、従来の寓意的な「神の怒り」とは一線を画している部分がある。彼は現世の政治状況に密着している。「暴君を懲らしめる」(punische tyrants for thair transgressioun, 1595) のではあるが、一方的に懲罰の剣を振るうのではない。政治的プロセスを重視して、「すべての階級からなる議会を招集し」(I will do nocht without the conveying / Ane parleament of the estai[i]s all: 1577-78)、そこで処罰を行うのである。

危険を察知したPlaceboの呼びかけにも「人間の王」は目覚めない。「人間の王」を目覚めさせるためには、Divyne Correctioun がその身体に触れる必要がある。(Get up, sir King, ye haif sleipit aneuch / Into the armis of Ladie Sensual. 1693-94) この肉体的接触はSensualityに衝撃を与える。(How dar ye be

so pert sir knaif / To tuich the King? 1690-91)

「道を踏み外した暴君を懲らしめる」(To punishe tyrants for thair transgressioun, 1595) ために来訪した神の意志を代行するDivyne Correctiounが、国王の体に触れるという行為は、「人間の王」の王権を揺るがし、かつ神の処罰が及ぶことを意味する。舞台上では演じられないが、これまで国王の身体に触れたものはSenseualityのみであった。それは、肉欲の交わりであり、国王としての墮落を象徴するものだった。しかし、いま、Divyne Correctiounがその手を国王の身体に触れることにより、浄化のプロセスが始まるのである。寓意的な国王の身体性に着目すれば、神の意思を代行するDivyne Correctiounが国王の身体に触れるという行為は、一種の儀式性をもって、「人間の王」の新たな戴冠を意味していると解釈できるだろう。

従来の道徳劇であれば、悪徳によって墮落させられた主人公は、悪徳の裏切りによる逆境を経験してから改悛し、神による救済を受け入れることになっている。しかし「人間の王」の場合には、信頼して来た悪徳に裏切られ、逆境に苦しむプロセスが存在していない。揺り動かされて目覚めると同時に、Divyne Correctiounを「厳肅な表顔つきで」抱きしめるのである。(The King imbraces Correction with a humbil countenance. 1776 SD) ここでも、表情によって改悛と救済を表しているのである。

この後、王は議会を招集し、この作品の身体表現としては最も印象的な、三階級が悪徳に導かれて後ろ向きに登場する場面となる。(Heir sall the thrie estaits cum fra the palyeoun, gangand backward led be thair vyces. 2315 SD) 作者が身体による表象に強

い意識を持っていたことが、ト書きからも窺えるのである。招集された議会において、国民代表のJohne the Common-Weillによる厳しい批判が展開されるのだが、これ以降、「人間の王」の出番はなくなる。「人間の王」が肉欲に溺れ、悪徳に操られるがままに無為に過ごしたために損なわれた国家の立て直しには、国王はほとんど関わらないのである。「人間の王」は改悛し救済された。それで道徳劇の条件は満たされた。現実の改革は、議会にゆだねられるのである。

『王威』にみる国王の身体性

『王威』も道徳劇の枠組みを用いて、宮廷生活を描く形式となっている。道徳劇の枠組みで描かれる主人公の危機は、しかし魂の救済ではなく、経済的な問題である。現世の宮廷で、国王の浪費が国家を危機に陥れており、それをいかに解決するかが問われている。

浪費に対する教訓は登場人物の一人Measureの台詞「中庸が肝心 (Measure is treasure. 125)」に表されている。しかし、主人公の「王威」は宮廷の悪徳たちにだまされて、MeasureよりもLyberteを重用してしまう。これが国王として大きな過ちであり、それが「王威」本人の転落の原因となる。

「王威」が登場するのは163行である。彼は登場するや否やFelicityの反対を押し切ってLibertyを自由に働かせることにする。Measureの属性である'reason'よりもLibertyの'will'を選んだのである。「王威」が理性を失ったことを意味する行為であり、自分を過去の英雄に比肩する1458-1515行にわたる一連の発言に繋がる。自分の力量を過信し、神をも運命をも畏れず破滅への道を辿る権力者の系譜に連なることになる。

その傲りを見透かしたようにCourtly Abusionが登場し、権勢を誇る君主にふさわしい肉欲（It is seeming your pleasure ye delight, / And to acquaint you with carnal delectation, 1547-48）と新奇なファッション（And to fall in acquaintance owith every new fashion; 1549）、さらには愛人を持つ快楽（To fasten your fancy upon a mistress 1551）へと誘い込む。いずれも身体性と密着する快楽である。もつべき愛人の肉体描写は、『三階級』でSolaceが語るSensualityの姿を彷彿とさせる（...her veins as azure indy blue,/ As lily white to look upon her here,... / Her mouth enbalm'd, delectable and merry,/ Her lusty lips ruddy as the cherry -- 1554-60）。

「王威」の返事（Ah, that were a baby to brace and to buss! / ... on such a female my flesh would be wroken, 1561&1567）も「人間の王」と同じである。どうやら「王威」も色恋についてはまだ無垢であるらしく、「愛人は金（かね）と金（きん）で買えるのか？」（Why, will a mistress be won for money and for gold? 1576）と無邪気とも言える質問をする。

Courtly Abusionは「王威」に彼自身の‘will’に従うよう忠告する（Be it right or wrong, by the advice of me / Take your pleasure and use free liberty; 1598-9. Let your lust and liking stand for a law; 1608）。‘reson’と‘will’のどちらを「王威」が選ぶか、それが国王の運命を決めることを彼も知っているのだ。

「王威」は‘will’に従うことを決め、Measureを宮廷から追放してしまう。「自分が好きなことの中から3つを選び、それに財産をつぎ込め」というCollusionの助言に従うMagnificenceがまず口にするのは、愛人の肉体を思いのままにすることへの期待である

（Ah lord, so I would halse her heartily! / So I would clip her, so I would kiss her sweet! 1800-3）。

しかし、ここが転換点となって、これ以降「王威」の運命は下降線をたどることになる。Fancyがこれまで「王威」を欺いてきた悪徳たちの正体を明かす。愕然とする「王威」の前にAdversityがあらわれるのだ。「王威」の肉体は恐怖にうち震える（Lord, so my flesh trembleth now for dread! 1876）。

役割から考えれば、Adversityは『三階級』のDivine Correctionに該当する。彼は「過ちを犯したものを罰するため神から遣わされ」（that for thy misdeed / From God am sent to quite thee thy meed. 1877-78）、「身分の高いものたちを引きずりおろし、打ち倒す」（I pluck down king, prince, lord, and knight; I rush at them rougly and make them lie full low; 1884084）。大きな違いは、Divine Correctionの処罰は寓意的に行なわれ、「人間の王」の肉体に暴力が加えられることはなかったのに対して、Adversityは「王威」の肉体を実際に打擲し、衣服をはぎ取るのである。（Here Magnificence is beaten down and spoiled from all his goods and raiment. 1876 S.D.）

Adversityが糾弾する「王威」の罪は‘reason’ではなく‘will’に従う生き方（This losel was a lord and lived at his lust; 1887）、己を知らぬ驕り（He knew not himself, his heart was so high; / ... / He was wont to boast, brag, and to brace; 1889-91）、飽くなき物欲と浪費（All worldly wealth for him too little was; / ... / Sometime without measure he trusted in gold; 1893-95）である。このうち傲慢さは前述した自らを過去の英雄に比肩することによって、

また、'will'に従い、物欲と浪費にふける行為はMeasureを追放することによって表される。

興味深いのは、Adversityは指摘していないが、暴力への渴望を「王威」が表明していることである。「気に入らないやつに復讐するまで気が取まらないだろう」(... rest shall I none have / Till I be revenged on that whoreson kanve! 1616-17) と焚き付ける Courtly Abusionに「王威」は同調して暴力的な傾向をあからさまにする。「気に入らないやつを鞭で打ったり、ぶちのめしたりして楽しんだ、ときどきやっているんだ」(For mirth I have him curried, beaten, and blissed, / Him that I loved not, and made him to lowt; / ... / For such abusion I use now and then. 1623-26)。'The stroke of God'(1883)であるAdversityによる打擲は、「王威」の魂への一撃でもあり、同時に、暴力を振るうことを歓びとしていた肉体への物理的な一撃でもあるのだ。だが、この一撃は、「王威」に改悛の情をおこさせはしない。彼は自分が失ったものを嘆き続けるだけである。

「王威」を陥れた悪徳たちが次々に登場し、彼をさらに追いつめる。Povertyは「王威」を持ち上げてベッドに横たわらせる (Here let him set about lifting Magnificence and he will place him on a bed. 1967 S.D.)。このベッドは死の象徴であると考えられているが (Neuss, 184)、身体性を読み取れば、「王威」が「人間の王」同様に肉体的活動をやめたことを表していると言えるだろう。Mischiefは首くくりの縄とナイフを持って登場し、(Here enters Miachief [with a halter and a knife]. 2309 S.D.) 自殺を教唆する (Lo, here is thy knife and a halter; and or we go further / Spare not thyself, but boldly thee murder.

2318-9.)。

国王の自殺は国家の終焉を意味することになる。だが、「王威」にはおよそ国家という意識はないようだ。彼の嘆きは、権勢を誇った国王である自分が現在のよな貧困に苦しめられていることに対する、個人的なものではない。後悔の念は垣間見せるものの、真の改悛にはいたらない。逆境に耐える資質を持たないというHappeの指摘通り⁵⁾、ナイフに手を伸ばすのである (Shall I myself hang with an halter? Nay; Nay, rather will I choose to rid me of this life / In sticking myself with this knife. 2321-3)。

首をくくるのではなく、ナイフでの自殺を選んだことも身体性を意識させることになる。ナイフを使っての自殺は、切り裂かれる肉体、ほとぼしる血を予感させるからである。切り裂かれ、血を流す肉体は、イエスの受難を想起させるだろう。⁶⁾

「王威」を救うのはDespairの反対概念であるGood Hopeである。逆境にさらされ、絶望感に陥って自殺を考える「王威」に訪れる将来への希望である。望みを失って自殺することほど重い罪はない、と彼は告げる (There is no man may sin more mortally / Than of wanhope through the unhappy ways / By mischief to breviate and shorten his days. 2337-39)。舞台にあるのは、肉体的に打ちのめされ、我が身に剣を突き立てようとしている「王威」である。破滅寸前に追い込まれている国家を具現化する、国王の肉体である。しかし、その肉体を、自殺という重罪で終わらせるわけには行かない。「王威」を救うのは、「肉体を癒す医者」である神の恩寵と、「良き希望」という名の薬剤師である (Sir, your physician is the grace of God. / ... / Good Hope

your potecary assigned am I. 2350-52)。神は魂だけではなく肉体をも癒すことに心を砕いていることがGood Hopeによって告げられる。(Health of body his busyness to achieve . 2370)「王威」が正しい君主になるためには、魂のみならず、肉体の健康を取り戻すことが必要なのである。

結論

『三階級』で暴君を懲らしめるために神に遣わされたDivyne Correctiounは、君主のあり方についても述べている (Quhat is ane King? nocht bot ane officiar, / To caus his leiges liue in equitie: / And vnder God to be ane punishcer / Of trespassours against his Maiestie. / Bot quhen the King dois liue in tyrannie, / Breakand Iustice for feare or affectioun, / Then is his Realme in weir and poverties, / With scamefull slauchter but correctioun. 1605-12)。この台詞は、12世紀の人文学者であるソールズベリのジョンが Policraticus(1159年)で言及している正しい支配者と暴君についての記述に符合する。(Book 4. Chapter 1)ジョンは 'while individuals merely look after individual objects, rulers are concerned with the burdens of the entire community' と指摘しており、国家という意識を持ちえず、個人の欲望を満たすことにのみ身をゆだねる「人間の王」と「王威」はまさに暴君に該当するのである。ジョンはまた国家を人体と見なし、四肢および内臓諸器官の正常な連携があつてはじめて有効に機能するという政治論を展開している。⁷⁾ Divyne Correctiounが「人間の王」に国家の改革を迫って告げる 'I will begin at thee quhil is the head'(1717)、さらにはGood Hope が「王威」

に告げる前述の'Health of body his busyness to achieve'は、作者がそのような思想的背景を持っていることの現れであろう。それが作品中に頻出する肉体への言及に繋がっているのである。

両作品とも、国王の肉体に関わる要素が多くみられることを指摘した。しかし、国王の過ちが国家にもたらす被害についての言及は一般的な警告にとどまる。国王の過ちあるいは無為による被害が、国王の覚醒によって修復され、改善される様子が描かれるわけではない。「人間の王」は国民の声を聞くべく議会を開催するが、そこでの議論はもっぱら他人任せになるのである。「王威」が学んだことも、運命の移ろいやすさ、現世の富のはかなさにとどまる。

ルネサンスを迎え、キリスト教的教訓だけでは描ききれない国家の問題を作者は意識していただろう。それが身体性を強く見せつける国王という、主人公の描き方に影響を与えている。しかい s、「人間の王」も「王威」もまだ寓意的人物から抜け出してはいない。だが、寓意の王から、その肉体的活動が国家の在り方を作り上げていく現実の王を描くことになる萌芽は芽生え始めていると言えるのではないだろうか。

注

- 1) 使用するテキストは、Douglas Hamer ed. *The Works of Sir David Lindsay*, vol. 2, 1931.
- 2) 使用するテキストは、Paula Neuss ed., *Magnificence*, Manchester UP.1980.
- 3) Peter Happe, *Four Morality Plays*, Harmondsworth, :Penguin Books, 1979. 61-63.
- 4) Hamer, vol.4. 174.
- 5) Peter Happe, *Four Morality Plays*, Penguin

Books, 1979, 61-63.

6) 両作で注目すべきは、十字架の上で破壊されたイエスの肉体(Wounded from the foot to the crown of the head; 2365)を連想させる誓言が多用されていることである。(I thee requeist quha rent wes on the Rude, 94) 十字架にかけられたイエスの姿は誓言として代表的なものである。『三階級』でも繰り返し出てくるが、多くは”be Gods passion”の形で用いられている。傷つけられた肉体を連想させる言葉が用いられているのは、”be God[i]s wounds”(991)、”terribilly with bludy wound[i]s rent”(1030)などがある。)より具体的な個所をあげる誓言も頻出するが、この点については別稿で考察したい。

7) *Medieval Political Theory - A Reader*, ed. by C.J. Nederman and K.C. Forhan, Routledge. 甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神』知泉書館 250-251。柴田平三郎『中世の春 ソールズベリのジョンの思想世界』慶応義塾大学出版会2002年。